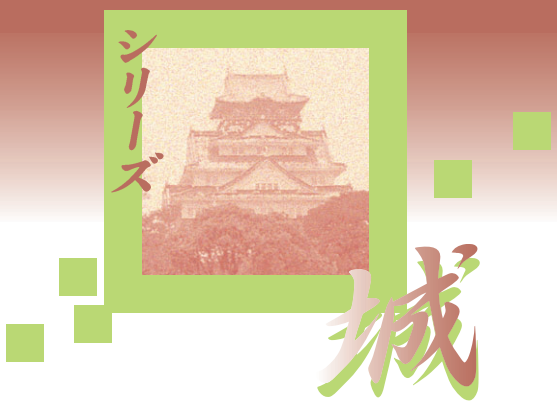


特許審査第3部プラスチック工学　深草 祐一

第六回　伊賀上野城
～忍びの里にそびえる高石垣～

今回ご紹介する城は、伊賀上野城です。伊賀と言えば忍者の里としてあまりに有名ですが、実際の歴史はあまり知られていないのではないでしょうか。また、伊賀上野城は築城名人として名高い藤堂高虎が築いた日本有数の高石垣で城郭ファンの間では結構有名なお城なのです。

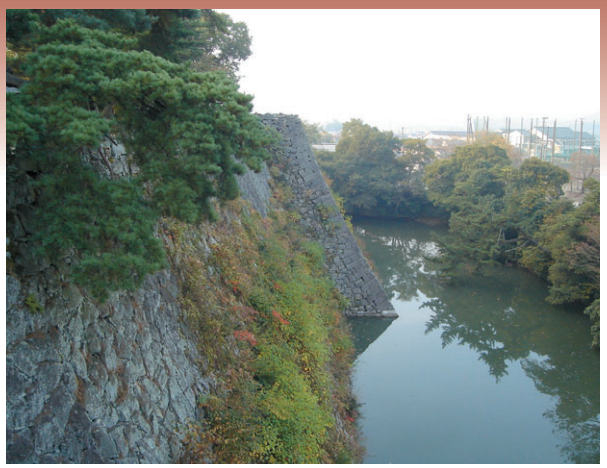
忍びの里・伊賀

伊賀上野城址の公園内には忍者博物館があるように、伊賀といえば忍者で有名ですが、忍びを用いたとされる武将は多く、忍びの技を使う者たちも全国各地に存在していました。では何故その中で伊賀・甲賀が特に有名なのでしょう。伊賀上忍家を継いだ藤林保武によって江戸時代初期に著された忍術書「萬川集海」によると、伊賀・甲賀は守護大名不在の地で、それぞれが自力で生き延びなければならかった状況が特に忍術を発達させたのだといいます。すなわち、誰もが常に戦時体制にあり、そして小勢で多勢に勝つための一番の方法として「忍び」（諜報・謀略）が重視され、普段からその工夫をするようになったというのです。更に彼らは下人にも潜入術等の実戦的な忍術を習わせたので、その中から忍術の達人といわれる下忍たちが現れて活躍するようになりました。これにより、小国の寄合勢に過ぎないのに隣国に一度も負けたことがなく、織田軍でさえ敗北したのだというのです（次段参照）。また、服部家、百地家、藤林家とといった上忍といわれる有力豪族は、時に隣国の大名から依頼を受けては必要な下忍を派遣し、敵城への潜入や火付けなどの忍びの仕事を行わせていたようです。ただ、優秀な忍びほどその仕事を人に知られることがないため、一体どれほどの活躍をしていたのか詳細は謎に包まれたままです。

天正伊賀の乱

このように独立勢力として自由に振舞っていた伊賀衆ですが、織田信長によって滅ぼされてしまいます。それが、天正伊賀の乱と言われる戦役です。時は信長が既に武田軍を長篠で破り、ついに石山本願寺を平定した頃のこと。伊勢の北畠信雄（織田信長の次男）は、伊賀侵攻のため築城し始めた城を伊賀衆に火計で焼き払われたことに怒り、信長の許可も得ず十分な準備もないまま伊賀攻めに向かいました。しかし、伊賀衆得意の山岳戦で迎え撃たれて大打撃を被ります。これを第一次天正伊賀の乱といいます。これを聞いた信長は、信雄の勝手で不思慮な行動に激怒したといいます。しかしその2年後、信長は伊賀を徹底的に殲滅すべく、信雄を総大将に織田家の壮々たる武将が率いる6万

伊賀周辺地図


伊賀上野城の高石垣

（3万とも）もの軍勢を周囲六道から侵攻させました。さしもの伊賀勢もこの兵力差は如何ともし難く各所で敗北。織田勢は神社仏閣・城砦のことごとくを焼き払い、老若男女問わず首を刎ねたといいます。こうして伊賀惣国一揆と呼ばれる伊賀の独立勢力は平定されました。これを第二次天正伊賀の乱といいます。

徳川家康の伊賀越え

本能寺の変が起こったのはその翌年のことでした。この時、信長の盟友徳川家康は安土城に招かれて饗応を受けた後、わずかな供を連れて堺見物に出かけていました。一旦は切腹を覚悟した家康でしたが、本多忠勝の説得で思い直し、伊賀を越えて伊勢へ抜け、三河へと駆け戻りました。これが後に「神君生涯の御艱難」と言われることになる伊賀越えです。この時家康は伊賀衆に護衛されつつ危険な伊賀の山中を越え、無事に三河へ帰ることができました。供の中には伊賀出身の服部半蔵正成も含まれていたことから、彼などが先行して在郷の同族に協力を要請したのではないかと言われています。しかしながら、家康は昨年伊賀で大虐殺を行った信長の盟友です。それを、伊賀衆は行く先々でまるで待ち構えていたかのように家康を守って伊勢へと導いたという……。この辺りの違和感が、本能寺の変家康黒幕説などがまことしやかに語られる所以の一つにもなっています。

伊賀上野城の築城

それから3年の後、織田家の跡目争いを制した羽柴秀吉の下、大和郡山から伊賀に転封となった筒井定次は天正伊賀の乱で焼かれた寺の跡地に三層の天守を備える城を建設しました。これが伊賀上野城です。しかし、後に関ヶ原の戦いで徳川が勝利すると、定次は失政を理由として改易され、代わりに伊予今治から伊勢の津に移った藤堂高虎が伊賀も領することとなりました。高虎は、家康の訓示に従って、豊臣の大坂城への備えとして伊賀上野城を大改修します。大阪に対する西側には高さ30mにおよぶ高石垣と深い堀を構築し、五層の天守を建造しました。ですが、天守は竣工直前に大風に遭って倒壊してしまいました。その後大阪の陣で豊臣家が滅び、武家諸法度により諸大名の城普請が禁止されたため、天守が再建されることはありませんでした。

日本最後の木造天守

このように伊賀上野城には江戸時代を通じて天守は無かったのですが、現在、城址公園には立派な白亜の天守がそびえています。実はこの天守、昭和10年に地元出身代議士の方が私財を投じて建築されたものとのこと。木造で外壁は純日本式土蔵壁とし、かつて五層の天守が築かれた天守台の上に3年の歳月をかけて建築された三重三層の大天守と小天守は見事なものです。それゆえこの模擬天守は「日本最後の木造天守」と呼ばれています。いわゆる本物ではありませんが、当時と同様の材料で造られたものが既に70年以上経って古色をにじませており、江戸時代初期の人々が眺めたお城というのはこんな風であったのか、と、感慨深いものがあります。

その他、伊賀は松尾芭蕉の出身地でもあり、城址公園内には「俳聖殿」という芭蕉の旅姿をかたどった建物が建っていたりします。これらの歴史をふまえた上で、伊賀を訪ねてみてはいかがでしょうか。

伊賀上野城天守